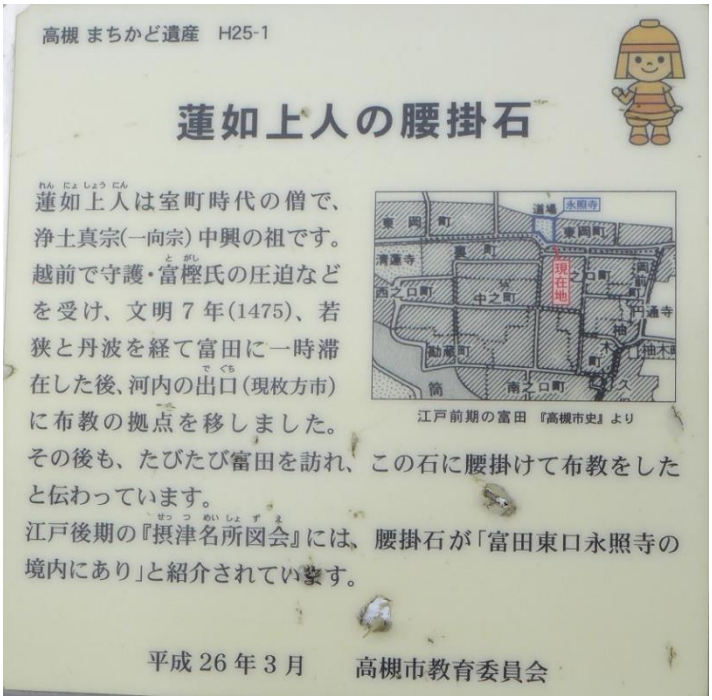

蓮如上人の腰掛石

蓮如上人は、室町時代の僧で、浄土真宗（一向宗）中興の祖です。
越前で守護・富樫（とがし）氏の圧迫などをうけ、文明 7 年（1475）、若狭と丹後・萩谷を経て富田に一時滞在した後、河内の出口（でぐち）（現在の枚方市）(出口御坊光善寺)に布教の拠点を移しました。

その後も、たびたび富田を訪れ、この石に腰かけて布教したと伝わっています。
江戸後期の「摂津名所図会」には、腰掛石が「富田東口永照寺の境内にあり」と紹介しています。　　平成 26 年　高槻市教育委員会

※ 晩年になった蓮如は自らが創建した教行寺によく訪れていたといわれ、「蓮如上人腰掛石」と呼ばれ、この石に座って布教をしたとされるテーブル状の岩が、旧永照寺境内（旧好田家の私寺・現在はマンション）に残されている。
旧永照寺境内には、旧富田小学校が本照寺境内から移転いた時期もあった。

※ 道端にあった石を家人が見つけたとも言われています。

※ 腰掛石は、蓮如上人が立ち寄られたところに多く存在するそうです。

※ お腰掛け石には蓮如上人の温もりが今も残り、大雪の時でも一番はじめに雪が解けると伝わる。

※ 戦国の動乱のなか、蓮如の「御文（おふみ）」による分かりやすい布教活動によって浄土真宗の教えは人びとに広がり、本願寺教団は飛躍的に成長しました。